○

駅の前や商店の前に、サンダルの化けものみたいな花鉢を置いて季節季節の花を植えたところはいいが、何と街のごみっぽく汚ないことよ、紙屑や屑ものが散乱し、道の両側の水はけは病眼（やんめ）のように砂やごみで埋まり、溝という溝はごみに埋まって、おはぐろのようなどぶがつまっている。その臭いどぶの上に平気で生活し、お菓子屋もあれば食堂もある。卓子の上には花を押したりして、きれいにしているようであるが、このどぶのきたなさには一向無関心らしい。花を植えるひまがあったら、どぶさらえでもした方がよっぽどましだと、どなたか気づいてくれる御仁はいないのか。

○

町には長い歴史があり、古い伝統がある。人々はその歴史の中に生き、その伝統を受け継いで、また歴史の一コマを書き足して、次の世代へ遺して行く。

「ふるさと」の歴史はそうして築かれて行く。その歴史をいま根こそぎぶち壊そうとするものがある。町名変更、改発がそれである。たくさんの費用をかけて、何の必要があってこんなことをするのか、全く以て判断に苦しむ。住んでいる町は自分の「ふるさと」である。その「ふるさと」の名が突然かえられて、お前の町はこう変るんだとおしつけられる。たまったもんじゃない。

「ふるさと」の喪失でなくて何であろう。

「ふるさと」の破壊でなくて何であろう。

公害といっしょにこの頃自然破壊がやかましい問題になっている。開発の名のもとに山がきり崩され、川が埋め立てられ。山林はばたばたと伐りたおされ、見る見る自然が破壊され姿をかえて行く現実に眉をひそめながら、またこんな「破壊」を敢えてする。どうかしてるんじゃないのか、俳聖正岡子規、詠って曰く。

「渋柿は馬鹿の薬になるまいか」と丁度時機もいい。こんなことを考えている連中に、うんと渋柿でも食わしてみたらどんなものだろうか。

○

猛暑去って、新涼にわかに至る、頭をひやして頭のかすを洗いおとして、うらもおもてもない、蓋をしてかくさなくてもすむような、ほんとにきれいな住みよい街づくりにみんなではげむべきだと思う。渋柿をかじるもよかろう。どぶ水を浴びるもよかろう。うわべだけの、みせかけだけの繁栄はごめんだ。

実のある、中身のしっかりしたものでなければならない。

絵に描いた餅は食うことができない。